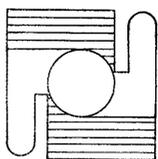


現代都市と歩行者空間

田村 明

九十九折の急な山道を登ってゆくのはつらい。自分の体重がじっくり体中に伝わってくる。なんでもこんな所を登ってゆくのだらうとさえ思う。しかし、やっと登りつめたあの頂上の風に吹かれている爽快さは、足で登った者だけの特権で、ケープルカーや車では味わえぬものである。人類の大前提は、直立二足歩行である。歩くことによって人類は自由に使用できる二本の手を得た。また直立によって重い頭脳を支えることができ、その頭脳の働きによるチエが、手の力をいっそうすぐれたものに変え、道具を發明し、機械や装置をつくってしまった。宇宙船も、コンピュータも、現代都市も、みなその所産である。歩けない人類は人類ではなく、今日の文明もなかったのである。

ドイツ人は今も目的もなく都市周辺の森の中を何時間も歩く。それは人間が人間であろうとすることなのだろう。哲学者カントも毎日のきまった散歩の中で、彼の比類のない哲学を生み出した。ところが、人類のつくりだした現代都市そのものが人類の基礎構造である歩行をいつのまにか蝕



みだしたのである。たしかに、歩行はつらく厳しい仕事であった。それを助けるための交通機関は、ヒトにとつての大きな福音であった。が皮肉なことに自動車の發明は人類から歩行を奪ってしまったのである。何よりも自動車文明は都市環境を悪化させて、ヒトから歩くための環境を奪ってしまった。以前、道路とはヒトの歩くためのものであったが、いつのまにか、車はヒトを道路からしめだした。騒音と排ガス、振動、不細工で急な歩道橋はヒトに歩く気をおこさせない。

この二〇年間、人間はヒトを歩かせないこと、歩きにくくすることに力を入れてきたように思われる。しかし、賢明な人類がこのままでいるはずはないだろう。ヨーロッパの町では至るところに愉しく歩けるスペースをつくりだしている。美しいシヨーウインドー、形のよいストリートファニチャー、場にあった彫刻、噴水、植樹。都市環境の中に歩くことの愉しさを復活させつつある。

愉しく歩ける空間をもつ都市は、人類とともに永続するであろう。しかし、これを軽視すれば、他のどんな都市施設があっても、ヒトのいない空虚な町にすぎない。〈技監兼都市科学研究室長事務取扱